海外研修報告書

企画戦略課法規担当
小林　紀子

〈概要〉

期間　　平成 27 年 10 月 18 日（日）～10 月 28 日（水）
場所　　サンフランシスコ

〈総括〉

1.　語学研修

3 日間の授業は会話の練習が中心で、自然な会話になるような言葉の選び方が学べた。授業は 3 日間午前のみ、トータル約 10 時間で、語学研修としては少し短く感じた。もう少し多く授業を受けられると一層良かった。週 18 時間以内の授業であればビザが不要なので、来年度以降の研修では、午後も授業を受けられると一層良いと思う。

2.　大学視察

(1) サンノゼ州立大学　　本学 OG の教員に話を伺った。

・サンノゼ州立大学の日本語クラスの学生と、九州大学、鹿児島大学の学生をオンラインで繋げ、話をさせる「コイルプロジェクト」を立ち上げ、それが現在も続いている。両校とは交流協定を結び、交換留学を行っている。両校はサンノゼに海外拠点を設け専任の担当者がおり、交流の話を持ちかけた際、迅速な対応があり協定がまとまった。本学はグローバル化を進めるために、海外との交流部門を強化すべきであると感じた。

・教員の評価は教育、研究、地域貢献が三大柱で、テニュア審査及び昇任時の審査は厳格に行われる。学生からの授業評価も判断材料になり、シラバスには授業内容、達成目標、評価基準が明確に記され、授業は活発で、寝ている学生は皆無だという。実力主義であることが教育の質向上に繋がっていると感じた。

・地域貢献として、大学で食事会を開いて地域住民を招待する等があり、教員自身が地元資産家の集うイベントに出向いて寄附をお願いすることもあるという。このような活動は教員の評価材料にもなっている。

・本学のサークル Ochas が不二家と共同開発したバウムクーヘンを持参したところ、各大学で「面白い」「企業とそんなことをしているのか」と興味を持ってもらえた。このような連携は企業にもプラスとなり、地域貢献になり、寄附金集めに繋げられると思う。

・入学時には門戸を広くするが、学位審査は厳格にするという考えがあり、入学者の能力差はばらつきがあり、学位を取れず途中で中退する者も多いという。

(2) スタンフォード大学　　事務職員に話を伺った。

・キャンパスは新しい建物が多く、施設が非常に充実しており、職員数も十分確保されているようだった（学生数：職員数＝1.6 人：1 人。本学は 28 人：1 人）。財源が潤沢であることが伺えた（学生一人当たりの事業費約 3,700 万円）。

スタンフォード大学の年間事業費は約 6,000 億円（510 億ドル）。東京大学が約 2,500 億円、本学は約 85 億円である。最大の財源は、寄附金を元本とした投資収益である。

スタンフォードでは、Stanford Management Company という部門が財務、不動産の管理を行っており、寄附金は投資にも回され、投資収益は事業費に当てられている。さらに、収益の余剰分は、寄附基金を維持するためさらに再投資されているという好循環がある。

理事にはゴールドマン・サックス、モルガン・スタンレー等の金融会社や投資会社の役員が名を連ねている。本学もファンドレイジング担当を置いたところであるが、専門家を置いて財務運営を行っていく必要があると思う。

また、訪問した日はホームカミングデイが盛大に行われていた。スタンフォード大学の学生は愛校心が強く、このような卒業生の集いが寄附金集めにも繋がっているそうだ。

・年間の授業料は、約 530 万円（44,184 ドル）と高額であるが、州政府からの給付奨学金も合わせると、何らかの経済的支援を受けている者は 82%に上る。

・1980 年代頃は日本からの留学生が多かったが、現在日本人留学生は少なく、中国人、韓国人留学生が多い。日本は他のアジアの国から取り残されていると感じた。

(3) ＵＣバークレー　　キャンパスツアーで見学を行った。

・キャンパスアンバサダーと呼ばれる学生がキャンパスツアーの案内をしてくれた。
先輩アンバサダーが新入りアンバサダーに行うトレーニングプログラムがある。また、大学についての各種情報を記した分厚いマニュアルもあった。定期的にアンバサダー同士のミーティングも開いている。また、ビジターセンターの職員がオフィスアワーを設けたり、メールを使ったりしてアンバサダーからの質問に答え、アンバサダーをサポートしている。

ツアーの中でアンバサダーは、なぜ UC バークレーを選んだか、自分が入学志願時に書いたエッセイについて等も話し、参加者は熱心に聞き入り、随所で質問していた。

本学でも徽音祭の際等にスポットで学生が案内するキャンパスツアーが行われているが、継続的に先輩から後輩に教育を行える形にしたら学生にとって良い経験を提供できると思った。

・カリフォルニアの州立 4 年制大学には UC と CSU という２つのシステムがある。UC は、「University of California」、サンノゼ州立大学は、CSU（California State University）である。UC は研究を主目的としており、学部教育では大学院への進学準備に焦点が置かれている。一方 CSU は実務的な教育を主目的としており、学部教育では、学士取得後に就職するための準備をすることに焦点が置かれている。

〈語学研修〉

期間：10 月 19 日（月）～10 月 22 日（木）

語学学校 1 日目。スピーキングのレベルチェックテスト。10 分程、なぜ勉強に来たのか等の質問に答える。その後、オリエンテーション。なお、リスニング、リーディング、ライティングのレベルチェックテストは事前にオンラインで受けた。

2 日目。15 人のクラスで出身国はサウジアラビア、韓国、台湾、ロシア等様々だった。前半は文法、単語、リーディング、ライティングの勉強を行った。後半はスピーキングの練習を行った。「あなたの国の国民性はどのようなものか」等のテーマをグループに分かれて話し合った。自分の考えを英語で話す練習になり、また、各国の訛りのある英語の聞き取りの練習にもなった。

3 日目。前半はメールを書く練習等を行った。メール独自の言い回しが学べた。後半は講師とは別にサンフランシスコの地元の者とのスピーキングの練習を行った。多様なネイティブの発音や語彙に慣れるため、複数の者を授業に招いているそうだ。講師の英語と違い、このネイティブの英語は非常に早く聞き取りづらかったが、実際の会話の勉強になった。

4 日目。前半はクラスメイトと「今までで一番困った経験」等を話し合う会話練習や、ゲーム形式で様々な単語を別の言葉で表す練習を行った。この場面ではこの表現を使ったほうが自然等、実際の会話について学べた。後半は「スタンフォードの自分を変える授業」の著者ケリー・マクゴニガルのプレゼンテーションの聞き取りを行った。

〈大学視察〉

期間：10 月 23 日（金）、10 月 26 日（月）

1. サンノゼ州立大学

10 月 23 日（金）サンノゼ州立大学を訪問し、日本語教育の A 准教授に話を伺った。

○サンノゼ州立大学の基本情報は以下のとおり。（大学 HP より（Fall 2014））

種別	公立
創設年	1857 年（本学より 18 年早い）
学生数	学部生 26,664 人、大学院生 6,049 人　合計 32,713 人（本学の約 11 倍） 学部生と大学院生の比率　約８：２（本学は約７：３）
教職員数	教員数 2,007 人
学問分野	文学、人類学、心理学、経済、工学、化学、栄養学、航空学等多岐にわたる。 ビジネスとコンピュータアニメーションが２大看板専攻とのことである。

○国際交流

A 准教授はサンノゼ州立大学の日本語クラスの学生と、九州大学、鹿児島大学の学生をオンラインで繋げ、話をさせる「コイルプロジェクト」を立ち上げ、それが現在も続いているとのことだった。両校とは交流協定を結び、交換留学を行っている。

九州大学はサンノゼに海外オフィスを設け、国際交流業務の経験豊富なベテランが所長を務めており、交流の話を持ちかけた際即座に返答があり、交渉がまとまったという。

A 准教授から「グローバル化を目指しているならば、お茶の水女子大学でも国際交流の担当者にはベテランを引き抜いてきて配置すれば、海外の大学から交流の提案があった際、迅速な判断ができるのではないか。」「数年任期ではなくある程度長期間責任を持てる者を配置したら継続性があるのではないか。」とのご意見を頂いた。

国際交流や就職支援等、元々専任の教員がいる訳ではないが近年必要性が増している分野も手厚くするべきである。

サンノゼ州立大学は、その他早稲田大学等私立大学とも交流がある。サンノゼ州立大学の学期は春学期が 2 月初めから 5 月まで、秋学期が 9 月から 12 月初めまでで、日本の大学からの交流要請は 9 月と 3 月に集中し、日本の大学と学期が合わないことが交流のネックになっているとのことだった。

本学では四学期制を一部導入したが、より留学を促進するには、派遣したい大学とできるだけ融通がつくよう学期を設定する必要があると思う。

〇寄附金

サンノゼ州立大学では、地域貢献を行い地域に根付くことが寄附金集めに繋がっているとのことだった。大学の近くにアドビやアップル等シリコンバレーの有名企業の本社があり、そこから寄附を得ている。また、教員自身が地元資産家の集うイベントに出向いて寄附をお願いすることもあるという。地域貢献として、大学で食事会を開いて地域住民を招待する、地域のイベントを手伝う（A 准教授は地域の日本語スピーチコンテストの審査員を行っているとのこと）等があり、このような活動は教員の評価材料にもなっている。

後述のスタンフォード大学でも、大学の近くの黒人が多く住む貧困地帯にある学校に大学院生を派遣して教育を手伝う等の社会貢献を行っているとのことだった。

本学も寄附金集めにおいて、近くに講談社等大企業の本社があることを活かすべきである。

また、本学のサークル Ochas が不二家と共同開発したバウムクーヘンを持参したところ、各大学で「面白い」「企業とそんなことをしているのか」と興味を持ってもらえた。このような連携は企業にもプラスとなり、地域貢献になり、寄附金集めに繋げられると思う。

〇教員の活動

A 准教授によると、教員が教育研究以外の大学運営、各種委員会に割く時間は日本と同様に多いとのことだった。

教員の評価は教育、研究、地域貢献が三大柱で、テニュアを獲得するまでには形式的ではない厳格な審査が毎年行われる。また、テニュア獲得後も昇任時には厳格な審査が行われる。学生からの授業評価も判断材料になり、シラバスには授業内容、達成目標、評価基準が明確に記され、授業は活発で、寝ている学生は皆無だという。

実力主義であることが教育の質向上に繋がっていると感じた。

〇入試

入試には教員は全く関わらないという。サンノゼ州立大学では志願者は高校での学業成績（GPA）及び SAT 又は ACT という大学入学希望者向けの適正テストの点数、高校からの推薦状に基づき、事務職員が選考を行っている。

これは、入学時には門戸を広くするが、学位審査は厳格にするという考えが背景にあるためだという。このような入試制度のため、入学者の能力差はばらつきがあり、学位を取れず途中で中退する者も多いという。

また、サンノゼ州立大学では成績の純粋な上位者から入学させるのではなく、中国移民のトップ、日系移民のトップ等、様々な集団のトップ層を入学させているという。後述のスタンフォード大学でも、入学者の多様性を保つために多様な人種から入学者をとったり、成績優秀であることに加え、エッセイを重視したり、音楽、地域活動等での業績を評価しているそうだ。本学でもペーパーテストの点だけによらない新フンボルト入試等を取り入

れているが、ポテンシャルのある学生を取ることがゆくゆくは大学の価値を高めることになるのだと思う。

〇専攻

サンノゼ州立大学では入学後に学生が専攻分野を選択する。これはアメリカでは一般的なことだそうだ。確かに、日本のように入学する際に学部を選び、その後学部を変えることがあまり一般的ではないことは、不合理であると思う。18 歳で向き不向きがはっきり分かっている学生の方が少ないのではないだろうか。本学のように副専攻があることは非常に良いことだと思った。現に A 准教授は本学の学部生だった際、副専攻で学んだ日本語教育に興味を持ち、今に至っている。

〇寮

サンノゼ州立大学では学部１年生（キャンパスから 30 マイル（約 48ｋｍ）以上離れた町の高校を卒業した者）は、１年目はキャンパス内の寮に住むこととしている。１年生が全寮制であることはアメリカでは一般的で、18 歳になると親元を離れ自立するという考えが強いとのことだった。また、大学に慣れさせることや、知り合いを作りやすくすることが目的と考えられるとのことだった。

キャンパス内には、キャンパスヴィレッジという一角があり、写真の高層ビルタイプの寮が並んでいる。

写真の寮では、年間寮費（10 ヶ月間、週５日の食事込み）が約１万６千ドル。一月約 19 万円であり、日本の感覚からするとかなり高額である。（本学ＳＣＣは月額３万円、国際学生宿舎は月額 4,700 円である。）

キャンパス

学生寮

2.スタンフォード大学

10 月 23 日（金）スタンフォード大学を訪問し、理系の教授の下で事務職員をしている B さん、C さんに話を伺った。

〇スタンフォード大学の基本情報は以下のとおり。

種別	私立
創設年	1891 年（本学より 16 年あと）
学生数	学部生 7,018 人、大学院生 9,118 人　合計 16,136 人（本学の約 5.5 倍） 学部生と大学院生の比率　約４：６（本学は約７：３）
教職員数	教員数 2,118 人　職員数 11,269 人
学部	人文・理学、 工学、 地球科学
研究科	人文・理学、 教育学、 工学、 地球科学、 法科、 医科、 経営

〇寄附金

スタンフォード大学では寄附金により建てられた建物が実に多かった。まとまった寄附があると校舎を新しく建てるのが常とのことで、新しい建物が多い。建物にはゲイツビル（ビル・ゲイツ）、ヒューレットビル、パッカードビル（ヒューレット・パッカードの創設者）等寄附者の名前がついた建物が、案内して頂いただけでも 10 以上あった。ビル一棟には届かない金額の場合には一つのホールに名前がついているものもある。建物だけでなく、コンサート等のイベントへの寄附（その場合はプログラムに寄附者の氏名が入るそうだ。）、有力なスポーツ選手を入学させてその者に対するスポンサーからの寄附等もあるという。

アメリカでは寄附をした者の名前をプレート等にして分かるようにするのが一般的だという。同窓生会館には、卒業生の寄附金を原資にした基金を紹介するプレートが掛けられていた。

訪問した日は調度ホームカミングデイで、キャンパスの至る所に「何年卒業者用」とう札がかかったパーティー会場が設けられていた。スタンフォード大学のカラーである赤色を身に着け、何年卒という札をつけた卒業生が老若男女集っていた。スタンフォード大学の学生は愛校心が強く、このような卒業生の集いが寄附金に集めにも繋がっているそうだ。

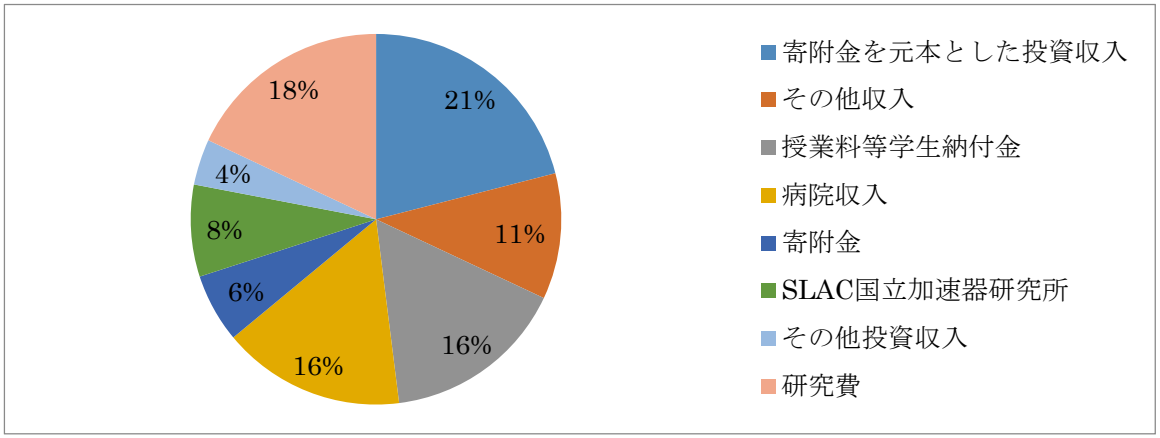
また、アメリカでは、企業はお金儲けだけではなく、社会貢献をしないと社会から認められないという風潮があり、寄附が一般的である。公共機関への就職を目指す学生向けに寄附金をいかに集めるかという授業もあるそうだ。

キャンパスには、新しい校舎が並び、教会、美術館、教員が訪問客をもてなすための食事施設、ジム、禅を取り入れた瞑想のための建物まであり、潤沢な資金があることが伺えた。

○財源

年間の授業料は、約 530 万円（44,184 ドル）と高額であるが、授業料収入が最大の財源ではない。

収入内訳は下記のとおりである。一番割合が多いのが寄附を原資とした投資収入、二番目が国、企業等からの研究費である。なお、スタンフォード大学の年間事業費は約 6,000 億円（510 億ドル）（SLAC 国立加速器研究所（スタンフォード大学が運営する国立研究所）も含む。）。東京大学が約 2,500 億円、本学は約 85 億円である。



スタンフォード大学は、2013 年度には 82,300 もの寄附者から約 1,080 億円（約 9 億ドル）の寄附を集めている。

スタンフォードでは、Stanford Management Company という部門が財務、不動産の管理を行っており、寄附金は投資にも回され、投資収益は事業費に当てられている。さらに、収益の余剰分は、寄附基金を維持するためさらに再投資されているという好循環がある。

スタンフォード大学では現在の学長が寄附金集めに力を入れ、寄附金担当部署を大きくし、今では寄附金担当部署が大学の顔のようになっているそうだ。

研究費について、特に理系教員は研究費を取ってくるのが重要な仕事であるそうだが、研究費の申請、報告書は教員やポスドクが作成するのではなく、専門の事務職員が行っており、教員やポスドクの研究時間がペーパーワークに割かれることはないとのことだった。また、教員が行う事務的な仕事は自分の研究費の支出チェックくらいで、会議もカリキュラムや、教員採用等教育研究に関するものだけであり、勤務時間の 9 割くらいは教育研究に集中できているとのことだった。

スタンフォード大学では、学生数は本学の約 5.5 倍だが、職員数は 100 倍以上になり、事務職員数が十分に確保されていると思われる（職員の内訳は経営、専門的職員 6,204 人、事務、技術職員 2,872 人、サービス、メンテナンス職員 809 人、国立加速器研究所 1,384 人）。本学でも、少しでも不要な書類は簡略化する等して、教員のペーパーワークを減らすべきである。

○留学生

C 職員が受け持っている教員は主に NASA からの研究費で研究を行っており、外国から研究員を受け入れることはあるが、アメリカの予算を外国人の研究費に使うことにはあまり積極的ではなく、留学生を積極的に受け入れることはしていないとのことだった。

また、1980 年代頃は日本からの留学生が多かったが、現在日本人留学生は少なく、中国人、韓国人留学生が多いとのことだった。確かにサンフランシスコの街を歩いていても、留学生らしき韓国人の若者は頻繁に見かけるのだが、日本人の若者はあまり見かけない。日本はグローバル化と言っているが、他のアジアの国から取り残されていると感じた。

○学生への経済的支援

スタンフォード大学は、アメリカ国民、永住者にはニード・ブラインド・アドミッションポリシーをとっている。これは家庭の支払い能力に関わらず、同じ枠の中で公平に審査する入試制度である。

年間の授業料は、約 530 万円（44,184 ドル）、その他に保険料、寮費、新入生のオリエンテーション費等も別途必要となる。

本学の授業料は 535,800 円、私立大学では例えば早稲田大学文学部で 821,000 円であり、日本の大学に比べて非常に高額である。

一方、スタンフォード大学は学生に対する様々な経済的支援を行っている。

経済的支援は、学生 1 人当たりに対し平均約 230 万円（19,230 ドル）に上る。

これは大学への寄附等を原資としており、ニード・ベースの奨学金、スポーツ優秀者に対する奨学金、貸与、大学の仕事を行うことに対する報酬、研究助成金等様々な形態のものがある。

なお、ニード・ベースとは、家庭の支払い能力を超えると支払い能力を超えた分の学費は大学が援助するという制度である。ニード・ベースの奨学金を受けている者は全学生の 48%に上る。

また、今年には、従来は家庭年収が 10 万ドル未満の学生に対して行っていた授業料無償制度を拡充し、家庭年収が約 1500 万円（12 万 5000 ドル）未満の学生の授業料を無償にすると発表した。

さらに、従来は家庭年収が約 720 万円（6 万ドル）未満の学生は寮費などの下宿代も無料になっていたところ、この上限年収も約 780 万円（6 万 5000 ドル）に引き上げられる予定である。

日本の給与所得者の平均給与は 414 万円であるから、日本ではほとんどの学生が該当しそうである。

これら大学が行う支援に加え、州政府からの給付奨学金も合わせると、何らかの経済的支援を受けている者は 82%に上る。

○経営陣

最大人数 38 人からなる理事会が寄附金及び全ての資産の管理、予算編成、資産運用並びに経営方針の決定を行っている。理事会は学長の指名も行い、学長に大学運営を委任している。理事にはゴールドマン・サックス、モルガン・スタンレー等の金融会社や投資会社の役員が名を連ねている。

私大であるスタンフォード大学とは事情が異なるが、国からの予算が減少し続ける昨今、本学でも財務経営に精通した者を置く必要があると思う。

ビル・ゲイツの寄附によるビル

学生の勉強スペースが至るところにある。

寄附金で建てられた同窓会館

ホームカミングデイの懇親会場

3. UC バークレー（カリフォルニア大学バークレー校）

○UC バークレーの基本情報は以下のとおり。（大学 HP より（Fall 2014））

種別	公立
創設年	1868 年（本学より 7 年早い）
学生数	学部生 27,126 人、大学院生 10,455 人　合計 37,581 人（本学の約 13 倍） 学部生と大学院生の比率　約 7：3（本学は約 7：3）
教職員数	教員数 1,620 人（常勤）
学部	自然科学、生物科学、社会科学、人文科学、学際研究
研究科	化学、工学、環境設計、人文科学、自然資源、教育、ジャーナリズム、経営、公共政策、情報、法科、検眼、公衆衛生

○UC と CSU

UC バークレーの UC とは、「University of California」の略である。カリフォルニアの州立 4 年制大学には UC と CSU という２つのシステムがある。サンノゼ州立大学は、CSU（California State University）である。UC は研究を主目的としており、学部教育では大学院への進学準備に焦点が置かれている。一方 CSU は実務的な教育を主目的としており、学部教育では、学士取得後に就職するための準備をすることに焦点が置かれている。

UC の入学条件は CSU より高く、UC ではカリフォルニアの高校卒業生の上位 12.5%であること、CSU では上位 33.3%であることが求められる。

授業料においても UC は CSU より高額である。UC バークレーの年間授業料は約 156 万円（12,972 ドル）（学部生、カリフォルニア住民の場合）で、サンノゼ州立大学（学部生、年間約 88 万円（7,378 ドル））の２倍近くである。

収入の差なのか、UC バークレーのキャンパスはヨーロッパ調の重厚な建物が並び、緑が溢れ非常に美しかった。

○キャンパスアンバサダー

10 月 26 日（月）、UC バークレーのキャンパスツアーに参加した。キャンパスツアーは毎日、1 時間半にわたって行われる。私が参加したツアーの参加者は 40 人ほどで、入学を希望する高校生、その保護者とみられるグループが多かった。

キャンパスツアーはキャンパスアンバサダーと呼ばれる学生が案内をしてくれる。この日は心理学を専攻する学生が案内してくれた。アンバサダーは、キャンパスツアーの案内、保護者向けの説明会、ホームカミングデイ等イベントの手伝いを行う。通常１週間５～７時間働き、アルバイト代は時給約 1,440 円（12 ドル）。年１回募集があり、希望者はＨＰから申込みし、グループ面接、個人面接を経て採用される。

募集の HP には、「アンバサダーは UC バークレーで最も影響力のある学生達の一部」「大

学を代表し、代弁する」「訪問客の第一印象を形作る」「入学志願者や保護者はアンバサダーを通じて最初に大学についての知識を得るため、進学先決定に重要な役割を果たし得る」等の言葉が並び、単なるアルバイトではなく、仕事の意味を意識して取り組んでほしいという姿勢が感じられた。

ビジターセンターでは、学生がキャンパスツアーの受付を行っていた。学生に話を聞いたところ、新しいアンバサダーには先輩のアンバサダーがリーダーシップ等についてトレーニングを行っているという。また、ツアーの案内をする際必要となる大学についての各種情報を記した分厚いマニュアルもあった。定期的にアンバサダー同士のミーティングも開いているという。また、アンバサダーが来客者の全ての質問に答えられる訳ではないため、ビジターセンターの職員がオフィスアワーを設けたり、メールを使ったりしてアンバサダーからの質問に答え、アンバサダーをサポートしているそうだ。

この日のアンバサダーもプレゼンテーションの仕方が身についており、非常に堂々と説明し、参加者からの質問にも丁寧に答えていた。

また、学生が案内をすることの利点は、志願者にオンラインや数字だけでは分からないリアルな生活を伝えられること、学生が大学生活をどう感じているか伝えられることだという。

この日のツアーでも、大学の施設、歴史等に加え、自分がなぜ UC バークレーを選んだか、自分が入学志願時に書いたエッセイについて、自分の留学予定について等も話し、参加者は熱心に聞き入り、随所で質問していた。

また、後日メールでキャンパスツアーについてのアンケート調査が届いた。この調査はキャンパスアンバサダーのプレゼンテーションがどうだったか 5 段階で評価したり、ＵＣバークレーへの志願決定に影響した点は何か、訪問して一番良かった点は何か、ツアーで改善すべき点は何か等を問うものである。フィードバックをきちんと行っていることが伺えた。

本学でも、徽音祭やホームカミングデイの際に学生が案内するキャンパスツアーが行われているが、学生がこのようなキャンパスツアーを行う機会が増えて、また先輩が後輩を教育する仕組みを作れば、学生にとって良い経験を提供できると思った。

〇学生の活動

UC バークレーでは学生の課外活動が活発で、学生の自治会に登録されている学生団体はスポーツや文化等 1,000 も以上ある。また、ボランティア活動に関わっている学生が多く、peace corps という政府が運営する海外派遣ボランティア団体に参加した学生数は全米の大学一だという。

キャンパスのメインとなる通りには両側に学生の自治会やサークルのテントが並び、参加者を募ったり食べ物のスタンドを出したりしていて活気があった。

教育・研究で世界有数のレベルの上、勉学以外の活動も活発なこのような大学で学ぶこ

とは、学生とって良い経験になると思う。今後、本学学生も UC バークレーで学ぶ機会ができるとよいと思った。

キャンパスツアーが何組も行われていた。

図書館

学生団体のテント

・参考資料

「Stanford Fact 2015」

「お茶の水女子大学大学概要 2015」

「Santa Barbara City College Transfer Center　‘UC&CSU Comparison Chart’」

「平成 25 年国税庁民間給与実態統計調査」

・大学視察報告は事前調査内容含む。

・1$=¥120 で計算。